上映映画解説

1955, 2~3

国立近代美術館　フィルムライブラリー

No. 33

月例映寫会について

国立近代美術館のフィルム・ライブラリーでは、内外古今の優秀映画の収集保存とその活用に努めております。今回は「十九人の作家」展の期間中、月例映写会として最新の教育・PR映画の優秀作から次の三本を選択し、毎週火・木・金・土曜日（日・水曜日は古典映画の鑑賞会）二時から上映いたします。

教室の子どもたち　三巻

企画製作　文部省
製作担当　岩波映画製作所
脚本・演出　羽仁進
撮影　小村静夫

これは二九年度の文部省企画作品のひとつで、小学校の先生、ことに新しく先生となった人たちの現職教育を目標としており、この種のものとしてはわが国最初の試みということができる。

この映画の舞台は主として東京都墨田区墨田小学校の二年生の一教室におかれている。その重点は、学校生活にもなれてきまた外向性をつよく示すような時期にもなっている二年生の、教室における自然なすがたをどこまでも客観的に写しとって（この点はこれまでに類例のない成功をおさめている。子どもたちはなんらの「演出」にしばられることも、またなにほどの警戒心にわずらわされることもなく、キ地のままでどんな名演技も足もとに及ばぬほどの表情と行動をくりひろげている）、学級社会におけるかれらの心の動きを徹底的に追求することに存している。

映画の構成はまず、工場地帯に近い小学校に子どもたちが登校してくる場面から教室でさわぎ遊ぶ二年生のすがたに移り、続いて担任の女教師と教育実習にやってきた若い女子大学生が登場する。そしてあれも教えたい、これもわからせたいと努力しながら、どうしても児童の心がつかめないで女子大学生が泣きベソをかきそうになる場面が示され、その話をきかされた担任教師の回想として、児童を威圧する男の教師の場面が対照的に現われてくる。そのどちらでもなく、もっと子どもたちに密着した学級経営をやっていきたい、そういった担任教師の述懐を切っかけとして、いよいよ本映画の主体をなす子どもたちのさまざまな姿態が展開することとなる。

身体検査・学習活動（全体及びグループ――後者はかなり重点的である）自習時間、校庭の遊び、それから社会的に消極的な三人の子どもたちの家庭におけるすがたがつぎつぎに描き出される。その間に身体的な条件、知的な条件・性格・生活環境・交友関係などの要因への関心がとりあげられるとともに、幼い子どもたちの性格は一面的・固定的なものでないこと、かれらのもつ可能性はあらゆる機会にいろいろなかたちで現われること、したがってかれらに対しては多角的な観察がぜひ必要であること、またくふうのしかたによってかれらの性格を変化し発展させうるものであることなども示唆される。しかしその主たるネライは、完全に自然な子どもたちの姿態集を資料として提供することによって、「まずそれぞれの子どもの個性を賢明に根気よくつかんでいって、学級経営を効果的にするためのしっかりした基盤をととのえる必要がある」ことを感じとらせる点にあると考えられる。

この映画は現職教育用（もしくは大学の講義用）だけでなしに、あらゆる児童研究の場における有用な資料となりうるし、またPTAの会合などで児童観察への有効な刺戟と手がかりを提供し、あわせてこうした子どもたちを指導する先生の苦心と努力に対して深く思いをいたさせ、その学級経営に協力していく気持をもりあげる上にもかなり効果的なものがあろうと思われる。始めてのいきとどいた低学年児童の姿態集というだけでなしに、この映画の教育的利用価値はなかなかに広く深いというべきである。

谷間の歴史　三巻

企画製作　関西電力株式会社
製作担当　日本映画新社
製作　白井茂・多田忠
監督　桑野茂・尾山新吉
撮影　奈宮進・中村清

これはよくまとまった電源開発のPR映画で、木曾川が深い山あいからようやく平野に出ようとする地点岐阜県八百津町にある「丸子ダム」の建設過程と、それが関係地域内の部落の生活に及ぼした影響のありかたがとり扱われている。この映画はダム自体の建設記録とそれによる谷間の変容というふたつのネライをもっているが、作者の重点はより多く後者の上におかれているらしい。電源開発映画には、ひたすら工事自体に集中するもの（たとえば「佐久間ダム」）、地誌的な味をもたせたもの（たとえば「天竜川」「新風土記北陸」）などとこれまで出ていて、それぞれが有意義なアッピールをもっているが、この「谷間の歴史」はそれらとならんで当然あってよいもひとつの面をやはり相当のアッピールをもってとりあげたわけである。電源開発のはなばなしい情景とそれによる大きな社会的寄与のかげに、ギセイとなる人たちのどのような悲みと苦斗がひそんでいるかということを、知識的とともに感情的にもしみじみと訴えかけることはきわめて意義深いものがあるというべきであろう。

ビール誕生　二巻

企画製作　日本ビール株式会社
製作担当　株式会社東京シネマ
演出　柳沢寿男

これはニッポン・ビールのP・R映画である。要するにひとつの「できるまで」映画ではあるが、イーストマン・カラーを効果的に馳使しながら、美しく生き生きしたふん囲気と一応の科学性を織りこむことによって、なかなかにたのしい「ビールの世界」を味わせるものになっている。作者は「ビールには麦のいのち、花のいのち、そしてこう母のいのちが一つになってあふれている」、そこを詩情をまじえて描き出そうとしたという意味のことをいっている。その意図はある程度具現されてもおり、おそらくこれまでで一番美しいものの一つといってよいイーストマン・カラーの効果と相まって、しばしばかなりに感銘深い画面がくりひろげられている。このように映画としてのアッピールをもりあげながら、そのアッピールがそのままスポンサーのめざすところに通じている点、これはたしかにすぐれたPR映画の一つになっているということができる。